

月刊

300



地図と学ぶ

通巻

624

地図中心

2024年9月

総特集

変わる金沢、 変わらぬ金沢





変わる金沢、変わらぬ金沢 —城下町・金沢の近現代—

いとう ざとる
伊藤 悟

人口46万人(2020年)を抱える金沢市について、地理学的には北陸の中心都市との位置づけを真っ先に行いたい。一般的には歴史都市としての認識の方がはるかに強い。実際、金沢といえば、兼六園や金沢城、茶屋街などの古いまちなみを思い浮かべる人は多く、城下町としての興味関心が注がれる。ただし、歴史都市としての近代以降の金沢の姿は、どの程度、知られているのであろうか。本稿では、そのような課題意識を持ちながら金沢を地図や古写真から探りたい。特に今日の都市構造を知るうえで鍵となる金沢の都心軸に焦点をあてる。

地・丘陵部のうち犀川と浅野川に挟まれた小立野台地は、両河川がもたらした河岸段丘であり、先端に金沢城が位置する(図1)。金沢の古称としての尾山は、まさに小立野台地と

いう山の尾を示す地形名称ともいえる。その尾山を取り囲んで、藩政期の幹道である北国街道が走り、街道筋の町人町は近代以降、金沢の都心軸を担うようになる。金沢の都心ないし都心部は、その広がりが面的というよりも、線状に伸びるため、都心軸と呼ばれる。金沢城を取り囲むように、言い換えれば小立野台地先端を取り巻くように都心軸の形成がある。

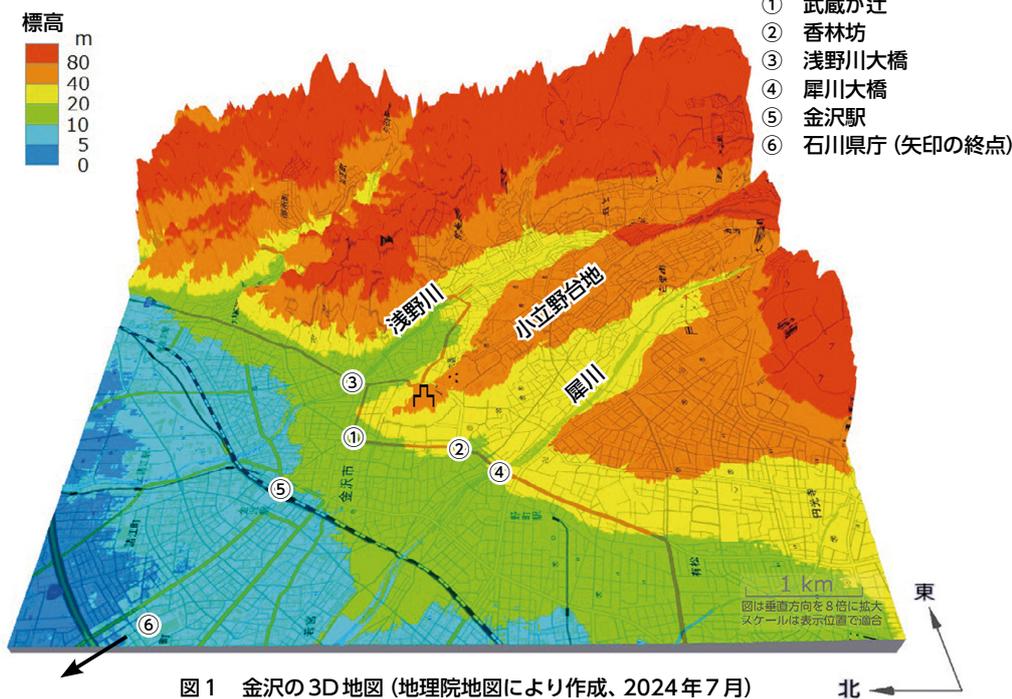


図1 金沢の3D地図(地理院地図により作成、2024年7月)

金沢の地形と都心軸

金沢は、日本海に沿って南西から北東に伸びる金沢平野と、その東側にあり両白山地につながる台地・丘陵部とが接する位置に広がる。台

地図中心 624号 目次【総特集 変わる金沢、変わらぬ金沢】

変わる金沢、変わらぬ金沢 —城下町・金沢の近現代—	伊藤 悟	2
古地図で楽しむ金沢 —加賀藩の城下図プロジェクト—	本康 宏史	6
金沢〜城と城下町〜	青木 賢人	10
石黒信由図と金沢・加賀	金田 章裕	14
金沢市で着々と進む「町名復活」	今尾 恵介	20
金沢市における私鉄路線網の変遷〜北陸鉄道・金沢市電と郊外鉄道〜	高橋 悠	24
金沢駅発・長距離列車の変遷	高橋 悠	27
白山と、川と、砂丘と、日本海〜金沢の地形をつくった自然の営み〜	宇根 寛	30
世界が認めた白山—白山手取川ユネスコ世界ジオパークと白山ユネスコエコパーク—	中村 真介・日比野 剛	34
「金澤市鳥瞰圖」吉田初三郎筆	編集室	38
「石川県鳥瞰圖」吉田初三郎筆	編集室	40
新旧地形図 1909(明治42)年/1909(明治42)年	編集室	42
新旧地形図 1916・1931(大正5・昭和6)年/1930(昭和5)年	編集室	44
新旧地形図 1948(昭和23)年/1957(昭和32)年	編集室	46
新旧地形図 1966(昭和41)年/1970・1973(昭和45・48)年	編集室	48
新旧地形図 1984・1989(昭和59・64)年/2000(平成12)年	編集室	50
新旧地形図 1991・2006(平成3・18)年/2024年(令和6)年	編集室	52
新旧空中写真 1946(昭和21)年/2007年(平成19)年	編集室	54
新刊地形図案内 56 / 今月新刊の見どころ!・日本地図センター便り 57 / 編集後記・次号予告 58		
《地図大使親書》城下町金沢を走る。地図を読む。また、走る。	石原 良純	60



《表紙》「石川県鳥瞰圖」吉田初三郎筆(40・41ページ参照)

図1のように、北から下ってきた北国街道は浅野川大橋(図中③)を南へ渡った地点で、西の武蔵が辻(①)方向へ右折する。この角には1873年(明治6)石川県里程元標が設置された。そこから武蔵が辻までの間は尾張町と呼ばれ、加賀藩祖・前田利家が生誕の地・尾張荒子(現在の名古屋市中川区)から呼び寄せた町人の居住地だった。藩政期からの老舗が今でも残り、金沢の旧都心軸といえる場所である。

武蔵が辻(①)は藩政期から今に至るまで最もよく知られている「辻」である。武蔵が辻の南東角には金沢市民の台所と言われながらも、今日インバウンド観光客で溢れかえる近江町市場がある。西角に立つ1973年完成の「金沢スカイビル」は金沢市で2番目の再開発ビルである。その地は大正期、呉服屋が立ち(図2aの左建物)、背後に住吉市場という青果の卸売市場があった。住吉市場は近江町市場の鮮魚卸売部門とともに、金沢駅の西(詳しくは図1中の⑥注記配置付近)へ移転し、金沢市中央卸売市場となる。武蔵が辻の北角には北陸初の再開発事業によって1969年に誕生したオフィスビルがあったものの、既に取り壊され、2007年都心居住マンションに生まれ変わっている。

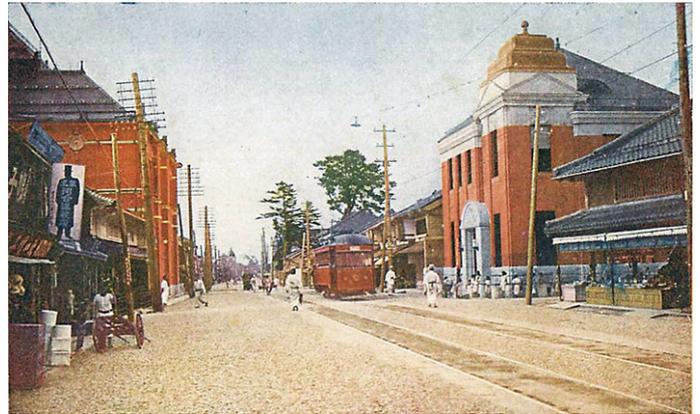
北国街道は武蔵が辻から南に向かうが、そのうち犀川大橋(④)までが一世以上以上にわたって金沢の都心軸の役割を果たし続けている区間である。武蔵が辻と香林坊(②)のほぼ中間にある南町は、藩政期初頭から金沢にあったという八つの町、すなわち尾山八町の一つとされる。明治期以降、金融機関の本支店や地元新聞社本社が建ち並び、金沢のFIRE産業集積の地であった。図2bにおいて通りの両サイドに写っている煉瓦色の建物は、いずれも全国的な金融・保険会社の支店である。た

だし、2000年頃から金沢駅の西側に移転するものも少なくない。跡地にはホテルの進出が目立ち、南町の性格は大きく変質しつつある。

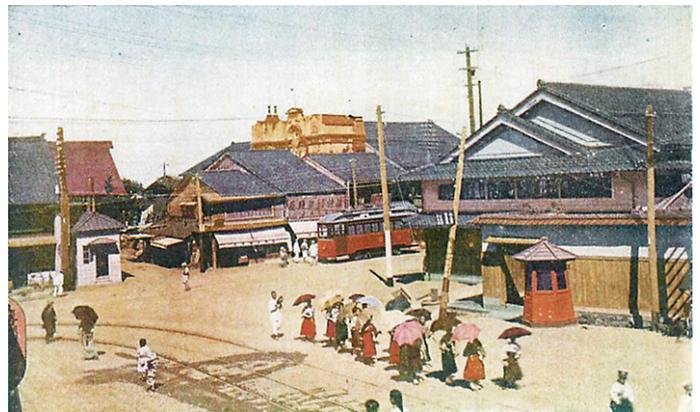
南町の南にある香林坊・片町は、武蔵が辻周辺と並ぶ金沢の商業中心地である。そのうち香林坊は、金沢神宮(香林坊大神宮)を取り囲んで映画館の立ち並ぶ地であった。図2cにおいて左側に写っている赤茶色屋根は同神社であり、ほぼ中央の奥にみえる近代的な建物は映画館である。香林坊は1980年代中頃、再開発により二つの大型商業施設が誕生したことによって、一挙に中心性を高めた。地元百貨店が本店を置き、金沢を代表する商業地の一つである。香林坊の東は広坂と呼ばれ、ここも都心軸の一角に見なされる。現在でも市役所や国の出先機関のある行政地区であるが、2003年の石川県庁移転、2004年の「金沢21世紀美術館」開館により、その雰囲気も様変わりした。香林坊の南の片町は、もともと香林坊よりも商業集積の高かった場所であるが、ここで1923年(大正12)に創業した地元百貨店本店が上述のように香林坊の再開発ビルに1986年移転後、飲食店街としての



a 東(尾張町側)からみた武蔵が辻



b 尾山神社前から北方向をみた南町



c 東(広坂側)からみた香林坊交差点

図2 1923年(大正12)頃の金沢古写真(金沢市立玉川図書館所蔵「金沢絵葉書」)

性格を強めた。

再び武蔵が辻に戻ると、武蔵が辻から金沢駅(⑤)、さらに石川県庁(⑥)までは金沢の新都心軸となる。1970年代は武蔵が辻周辺、1980年代は香林坊が金沢における都市再開発の中心であったが、その後は武蔵が辻から金沢駅間に移った。特に金沢駅周辺での再開発事業の進展は目を見張るものがある。1993年に完成した金沢駅前の「ポルテ金沢」は、今でも北陸3県最高峰(130m)のビルとして、金沢駅周辺のランド



マークになっている。このビルはホテルが主であるが、2006年に同じ駅東口前で複合商業施設として開業した「金沢フォーラス」は、金沢駅周辺を武蔵が辻や香林坊に匹敵する商業中心地へ一気に押し上げた。

新都心軸は、今や金沢駅を超えて北西方向に延伸している。その大きな吸引力は2003年に広坂から移転した石川県庁である。金沢駅と石川県庁の間には、かつて南町あたりにあったものを含めてFIRE産業が再集結しつつある。代表例をあげれば、北國銀行本店（移転2014年）や日本銀行金沢支店（同2023年）になるが、この他にも数多くの金融・保険会社に移ってきた。マスコミでいえば、中日新聞北陸本社は2010年から、かつて大手町にあったNHKも2018年から、この地にある。

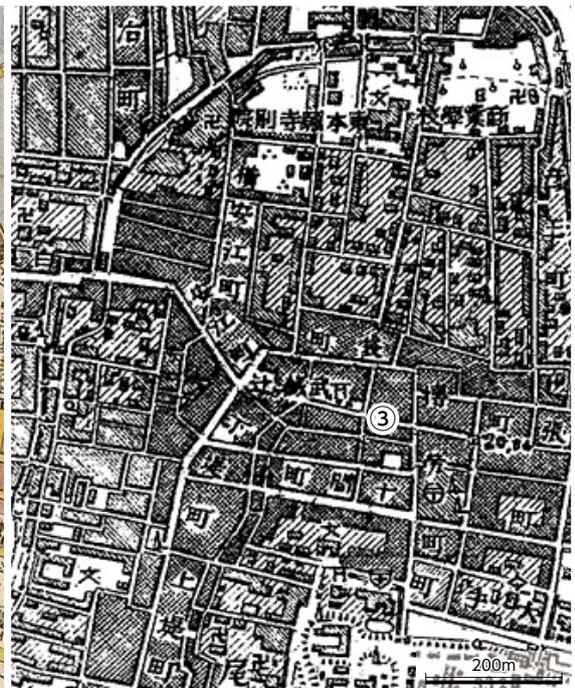
武蔵が辻周辺の変化

武蔵が辻は、新旧・現の都心軸3本が交わるという意味で金沢の最重要結節点といえる。その武蔵が辻周辺の変化を城下町・金沢の典型例として、新旧地図から探りたい。金沢は非震災都市ゆえ地図上での、特に街路の変化が乏しいとよく言われるものの、丹念に探ると興味深い事実を読み取ることができる。むしろ、そういう都市だからこそ、他都市では見過ごされる機微がある。図3では、a～dの4枚の新旧地図を用意した。

まず、これらの図が示す範囲について最新の図3dで説明すると、同図の南東隅が金沢城郭の一部となる。そこに描かれている水面は大手堀であり、それ以南が金沢城郭となる。図のほぼ中央にあって、4本の太い道を発する交差点は武蔵が辻で



a 金沢町絵図 1857年(安政4)頃
石川県立歴史博物館所蔵 大蔵コレクション



b 陸地測量部2万分1正式図「金澤」
1909年(明治42)測図、1910年(明治43)発行

図3 武蔵が辻周辺の新旧地図

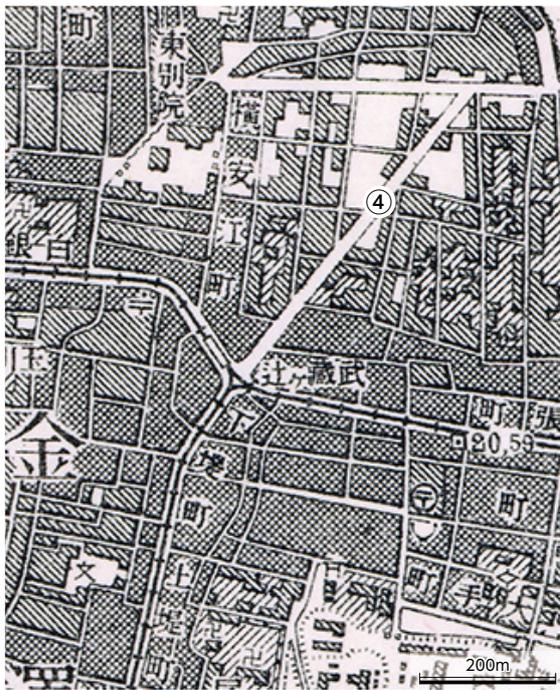
ある。武蔵が辻の西は武蔵町、北は安江町となる。北東には彦三町、南東には十間町との注記文字がある。武蔵が辻から国道159・249・304号が東に向かい、旧都心軸である尾張町を貫通する。武蔵が辻から南に向かう国道157・305号沿線が現都心軸となり、武蔵が辻から北西・金沢駅方向に伸び、中央分離帯のある道沿いが新都心軸である。

金沢では城下町由来の道路が色濃く残る。藩政期末の姿を描く「金沢町絵図」(図3a)と最新の地理院地図(図3d)を比較してみると、それがよく分かる。なかでも城下町の名残を示すものとして注目したいのは、^{そうがまえ}惣構を示す道筋である。金沢城と城下の防備のため藩政期初め、内惣構・外惣構という二重の惣構が造られた。図3aの町絵図では、2本の堀(および緑地)が南西から北東に弧を描くが、これが惣構である。南東側(城側)が内惣構、北西側が外惣構になる。惣構は堀と城側に盛り上げられた土居から構成される。土居には竹や木が植えられたといい、図3aでは堀の城側が緑地として描

かれている。今では土居は削られ、その土で堀も埋められ、住宅や商店などの土地利用に転換した。

ただし、惣構の両サイドを走っていた道は、そのまま現在も残っていることから、惣構の存在を明治期以降の地図から読み取ることができる。読み取り易いのは図3cである。同図の西端に「金」の大きな注記文字があるが、その下を南北に2本の道が間隔を変えながらも並走している。これらは外惣構の両側にあった道である。道は北に進むと1本は途切れるものの、東別院の東側では再び2本になる(図3aに描かれている外惣構の位置と対照されたい)。内惣構も識別できる。下堤町や上堤町の注記文字東側にある2本の道が、それである。図3bやdでも惣構に沿う2本の道が読み取れる。金沢は城下町として多くの観光スポットを抱えるが、城下町構造の遺構である惣構の側道に関心を払っても良いだろう。

藩政期から明治末期までの変化を図3aとbで比較してみよう。図3a中の南東にあり、大手堀の北にある前田対馬守家の屋敷(同図中①)



c 陸地測量部 2.5 万分 1 地形図「金沢」
1930 年 (昭和 5) 測図、1933 年 (昭和 8) 発行



d 地理院地図 (2024 年 7 月取得)

は、同図中で最も大きな区画である。同家は加賀藩の重臣にあたる加賀八家の一つである。東西 200m 余り、南北約 140m の敷地は明治になって、東西・南北の道が入り四分割された。後に税務署や電話局が、この地に設置される。南西にある前田土佐守家の敷地 (2) も東西を貫く道路で分割された。さほど広くない武家の敷地の場合、道による分割はないものの、敷地境界に道の生まれるケースが、両図を比較すると南西部のあたりで多々見つけられる。ちなみに、北西にある東末寺 (東 (本願寺) 別院) は敷地が広いものの、武家地と違って道路で分割されるようなことはなかった。

この他に明治期には、武蔵が辻から尾張町に向かって、1 本の道が開通している。図 3b では武蔵が辻の注記文字や神社記号の直ぐ南の道 (3) である。藩政期の北国街道は、武蔵が辻から 70m ほど北上後、200m あまり東進、そこで南進のうえ、3 東の交差点から左折して、尾張町を通るルートであった。言い換えれば、図 3b ~ d にある武蔵が辻の注記文字や神社記号の北側を迂回

していたわけである。それが 1904 年 (明治 37) の「近江町丸焼け」と呼ばれる火災で一帯が焼失した際、武蔵が辻から尾張町へ直行する道路が切り開かれたのである。図 3b から c へ目を転じると、武蔵が辻から北東に向かう幅の広い道路 (4) の新設に容易に気づく。加えて、この道路の北端を東西に走る道も新たな登場である。ともに安江町から浅野川までを焼き尽くした 1927 年 (昭和 2) 「彦三の大火」後に設けられた道路である。この頃は、火災がなければ新たな道路が生まれにくかったのである。

図 3d では、武蔵が辻から北西の金沢駅までが、ほぼ一直線の道路 (5) で結ばれるようになった。1927 年の最初の都市計画図から描かれていたものが、約 70 年を経た 1996 年、ようやく開通した都市計画道路である。このほかにも幅の広い都市計画道路の開通ないしは延長が図 3d から読み取れる。一方で、武蔵が辻の西にあって南北に走る小道 (前述の住吉市場を貫いていた道) や、武蔵が辻から南東に向かう小道 (近江町市場を通り抜ける道) は、図 3d では

消えている。各地区の再開発により完成したビルのなかに、それらの小道が取り込まれていったからである。昭和になってからの道路の地図上での出現や消滅は、都市計画事業を背景とするわけである。

最後に、城下町・金沢は道路網が複雑と時に言われることについて触れておきたい。京都などの条坊制の都市には到底及ばないが、藩政期の金沢も地形の制約を受けないところでは、東西南北に走り、直交する道が実は少なからずある (図 3a を再度ご覧いただきたい

い)。道路網にイレギュラーをもたらしているのは、もっぱら惣構である。しかし、近代に入って車を通すために造られた幹線道路は、従前の直交道路網をしばしば斜めに分断した。典型的な例は図 3c の 4 や d の 5 であり、その沿線では三角、五角区画が発生し、特に 5 沿線では、再開発で建設されたビルの側面が道路と平行ではなく、道路とビル角の接する特異的な景観が形成されている。ちなみに、ここは金沢市によって近代的都市景観創出区域の 1 つに指定されている。新幹線で金沢駅に着いた際には、武蔵が辻に向かう途中で、是非そのような景観も眺めて欲しい。いずれにしても、金沢の道路網は歴史のレイヤーの重ね合わせから成り立っているのである。

伊藤 悟



1956 年、秋田県生まれ。金沢大学名誉教授。専門は都市・交通地理学、地理情報科学。詳細は Researchmap.jp/read0009741

編集後記

「金沢市鳥瞰圖」(P 38 ~ 39)の表紙が特集内に掲載が叶わず、こちらでご紹介します。

能「安宅」の冒頭部「かやうに候ふ者は。加賀の国富樫の何某にて候。さても頼朝義経御中不和にならせ給ふにより。判官殿十…」と朝顔を背景に敷き、その上に歌川広重「六十余州名所図会 加賀 金沢八勝之内蓮湖

之漁火」と「前田利家像」を重ね合わせています。

吉田初三郎は「大正広重」と自称して、歌川広重に自分を重ね合わせていました。大正広重による歌川広重の模写はいかがでしょうか。前田利家像の原画と合わせて、吉田初三郎の模写の腕を御覧ください。

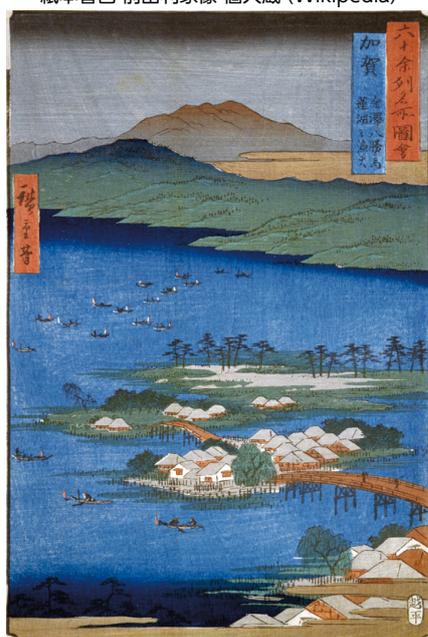
(編集長・小林政能)



紙本著色 前田利家像 個人蔵 (Wikipedia)



「金沢市鳥瞰圖」表紙・吉田初三郎筆・1932 (昭和7)年



歌川広重「六十余州名所図会 加賀 金沢八勝之内蓮湖之漁火」(国立国会図書館)

次号予告 2024年10月 通巻625号

毎月10日発行

地図と学ぶ 月刊

地図中心 **特集**

蒙古襲来 750年

時は鎌倉、8代執権・北条時宗の世。モンゴル帝国第5代皇帝・クビライは日本攻撃を命じ、日本側も防衛体制を整えて迎え撃つ「蒙古襲来」から2024年で750年が経ちます。文永の役(1274[文永11]年)と弘安の役(1281[弘安4]年)の2度の蒙古襲来を、地図で読み解きます。

地理院地図上の「元寇防壁」の分布



地理院地図 (2024年8月取得)

バックナンバーのご案内

地図中心

検索

「地図倶楽部」へのご入会をお待ちしています! 03-3485-5417(事務局)

地図中心

2024-9 通巻624号

発行 2024年9月10日

発行所 一般財団法人日本地図センター
〒153-8522

東京都目黒区青葉台4-9-6

電話 03-3485-8125

FAX 03-3485-5593

(月刊「地図中心」編集室)

メール chushin@jmc.or.jp

URL <https://www.jmc.or.jp>

©一般財団法人日本地図センター

定価 880円(税込)

印刷所 昭栄印刷株式会社

地図と学ぶ月刊誌



本誌の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転載することは、法律で認められた場合を除き、禁じられています。

2024年8月号(通巻623)で、誤りがありました。訂正して、お詫び申し上げます。

P.32・日本プロ野球 球団変遷図

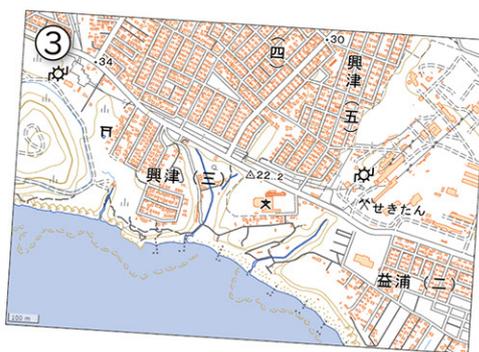
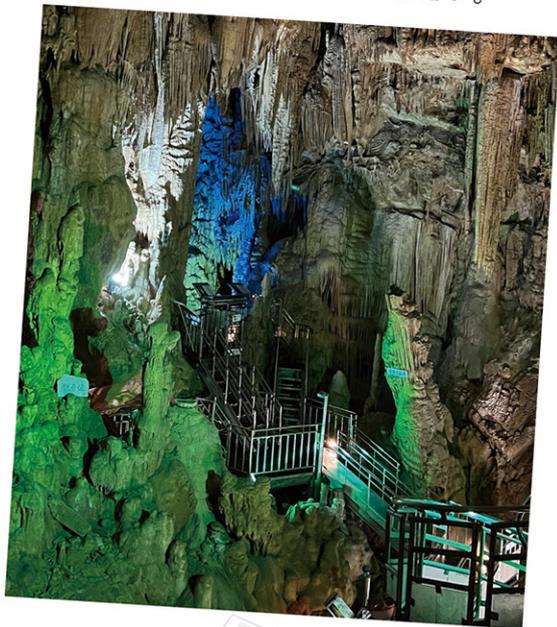
(誤) 大洋ロビンス→(正) 太陽ロビンス

地図地理検定

かこもん
(基礎)

第39回出題
問10
正解率86.8%

次の写真は、カルスト地形の一種である福島県のおぶくま洞内部を撮影したものです。地理院地図①～④のうち、カルスト地形を示しているものを1つ選びなさい。



詳細を
Check!



地図地理検定
私も推薦します!

等高線や地図記号の意味
を知れば、地図に描き込
まれた無限の情報が理解
できます。

地図大使
石原良純さん



11月10日

検定実施日
2024年
日 日

申込締切：10月下旬 (詳細はウェブサイトアクセス!!)